Japanese Overseas Migration Museum News
No.60
2023 September

海外移住資料館だより

日本人の海外移住は150年以上の歴史があります。JICA横浜 海外移住資料館では、海外へ移住し、それぞれの国や地域で新しい文明作りに参加してきた日本人移民の歴史と、日系コミュニティについて広く理解を深めてもらうことを目的に、さまざまな資料を展示しています。

■発行元：JICA横浜 海外移住資料館
神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2階
Tel:045-663-3257(代)
URL: https://www.jica.go.jp/domestic/jomm/index.html
■編集発行人：JICA横浜 海外移住資料館 館長 大野 裕枝

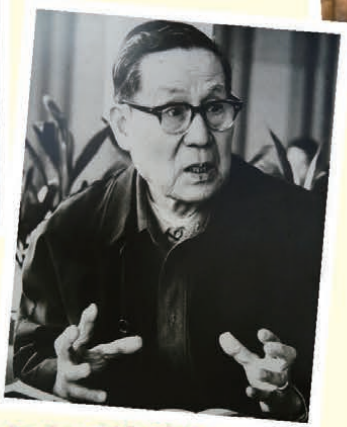
紀州魂ここにあり！
世界で活躍する和歌山移民

2023年 9月2日(土)～11月12日(日)

戦後ブラジル移民の父
松原 安太郎

東京にオリンピックを呼んだ男
和田フレッド勇

アグロフォレストリーの父
坂口 陞



収容所体験を記録した画家
ヘンリー杉本

カナダ移民の父
工野 儀兵衛

紀州魂ここにあり！
世界で活躍する和歌山移民

和歌山が、海外へ多くの移民を送り出した県であることはあまり知られていません。和歌山は山地が多く、耕地となる平地に乏しかった一方、広い範囲で海に面しており、古くから遠洋漁業が発達し、江戸時代から菱垣廻船（ひがきかいせん）など関東地方への人の移動が見られました。漁業や開運事業に携わってきた海洋民族としての気性が、異国へ挑んでいくこともいとわない県民性を生んだのです。戦前、和歌山県からたくさんの人が新天地を求めてハワイ、カナダを含む北米、南米へと移り住みました。また真珠貝取りでオーストラリアへ渡ったダイバーもほとんどが和歌山県人でした。こうした人々が故郷へ送金した額は、大正末期まで全国で一番多かったと言われています。そして、戦後、ブラジルへの移住再開の道を開いたのも和歌山県人だったのです。海外移住資料館では、2023年10月に和歌山県で開催する「第2回和歌山県人会世界大会」にあわせて、9月2日（土）から11月12日（日）までミニ展示「紀州魂ここにあり！世界で活躍する和歌山移民」を開催中です。和歌山から「紀州魂」とともに世界へ飛び出した偉人達の活躍をご紹介します！

偉人 その 1

戦後ブラジル移民の父

松原（まつばら） 安太郎（やすたろう）

「戦後ブラジル移民の父」として知られる松原安太郎は、1892（明治25）年、和歌山県日高郡岩代村（現みなべ町）で生まれました。尋常小学校を卒業後、20歳の時に広島の呉海兵団に入隊すると、巡洋艦の乗組員として第一次世界大戦に出征。除隊後は南洋航路の機関士として働き、ブラジルに寄港したことがきっかけで、自らの人生を切り開こうと1918（大正7）年にブラジルへ移住しました。

最初は、契約農民としてサンパウロ州近郊のコーヒー農園へ入植した松原でしたが、現地の人々から「彼のエンシャーダ（草刈り用の鍬（くわ））は普通の2倍の大きさだ！」と噂されるほど人一倍働き、わずか5年ほどで独立を果たします。そして二十数年後、松原は、コーヒーの木25万本を育て、東京ドーム96個分もある広大な牧場には牛2,000頭を抱えるほどの大農場主となりました。農場内には労働者とその家族が暮らし、小学校、雑貨屋、製材所、レンガ工場、コーヒー工場などもあり、まるでひとつの村のような発展ぶりだったと言われています。

ここまでは、移民として成功した一農場主のストーリーかもしれません。しかし、松原の活躍はここからが本番です。農場の顧問弁護士を通じて時のブラジル大統領ジェツリオ・ヴァルガスと親交のあった松原は、15年続いた長期政権にかげりが出ていたヴァルガスを強力に支援。その結果、大統領として返り咲くことができたヴァルガス大統領から「今度は自分が何か協力したい」という申し出を受けます。それに対して松原が求めたのが、第二次世界大戦によって中断していた故郷からの移民の受入れ再開だったのです。

松原からの強力な支持を受けて1951年に大統領に返り咲いたヴァルガス氏（中央）。
この写真は、1952年9月29日に松原の農場を訪ねたときのもの。

1952（昭和27）年、ヴァルガス大統領の命を受けたブラジル政府は、「松原移民4,000家族」の受入れを承認。翌年には、戦後初となる日本からの移民第1陣がサントス港に到着しました。その後、ヴァルガス大統領の死去や、土地の悪条件により脱耕者が続出したことによるブラジル政府からの賠償金請求など、苦しい時期を経験した松原ですが、私財を投げうって4,000家族の移民枠を守りきりました。松原移民はその後、JICAの前身である海外移住事業団に受け継がれ、約6万人もの戦後ブラジル移住へとつながったのでした。

偉人 その2

東京にオリンピックを呼んだ男

和田フレッド勇（わだ いさむ）

1907（明治40）年、北米ワシントン州で和歌山県出身の日本人夫妻の子として生まれた和田フレッド勇は、幼少期を和歌山の母方の祖父母の下で過ごしました。その後、米国に戻りスーパーマーケット経営で成功し、カリフォルニア州で17店舗を構えるまでになりました。そんな折、1949（昭和24）年にロサンゼルスで開催された全米水泳選手権大会に出場する日本人選手たちの宿泊場所として、和田は自宅を提供し選手団をサポートします。慣れないアメリカ遠征で日本式のもてなしを受けた選手団は大健闘。古橋廣之進選手が複数の種目で次々と世界新記録で優勝し「フジヤマのトビウオ」として大注目され、その他の選手も好成績を収めることとなりました。これを機に、当時まだ旧敵国民として「ジャップ」と呼ばれ差別されていた日本人・日系人に対するアメリカ人の評価も一変し、地位向上につながったと言われています。

その後、日本で東京オリンピックの招致に向けて準備が進む中、日本水泳連盟会長から相談を受けた和田は、日系アメリカ人として唯一招致委員に就任します。当時の岸信介首相からも親書による協力依頼を受け、和田は旅費等を自己負担して中南米各国を訪れることを決意。夫人を伴ってメキシコ、パナマ、キューバ、ベネズエラ、ブラジル、アルゼンチン、チリ、ウルグアイ、コロンビアを回り、IOC委員たちに東京へのオリンピック招致を訴えたのです。和田は、「日本は敗戦で厳しい試練を受けたが、今や平和な国によみがえり、オリンピックを開催できるまでに復興した」「オリンピックの開催こそが、日本の人々に勇気と自信を与える。そのために微力を尽くすことは、日本を祖国に持つ我々の使命なのです」と力説し、中南米各国の同意を取り付けることに成功。開催地を決める第1回投票で、東京が見事過半数を獲得したのでした。

1964年、日本初のオリンピック開催となる東京オリンピックが実現した裏には、ひとりの日系人による祖国への無私の奉仕と尽力があったのでした。

全米水泳選手権大会に日本から参加した橋爪四郎（左から2人目）と握手する和田（右端）。中央の古橋廣之進は、400m、800m、1500m自由形と800mリレーで世界新記録を樹立し、現地の新聞などで「ザ・フライング・フィッシュ・オブ・フジヤマ（フジヤマのトビウオ）」と称賛された。彼らの活躍は、敗戦で沈んでいた日本人の心に希望の光をもたらした。

偉人 その3

収容所体験を記録した画家

ヘンリー杉本（すぎもと）

第二次世界大戦中、家や財産の放棄を余儀なくされ、日系人収容所での生活を強いられながらも、収容所内の人々や日常を克明に描き続けた日本人画家がいます。1900（明治33）年、和歌山県海草郡湊村（現和歌山市湊）で生まれたヘンリー杉本（杉本譲（ゆずる））は、旧制和歌山中学校を卒業した後、当時すでに出稼ぎ移民として米国カリフォルニア州に移住していた両親の呼び寄せにより、1919（大正8）年に単身で渡米しました。渡米後しばらくは農園で働いていましたが、その後、子どもの頃から得意だった絵を学び、画家の道を目指すようになります。そして、パリへの留学、新人画家の登竜門であるサロン・ドートンヌの入選も果たし、日本人画家として注目を集めるようになりました。

しかし、1941（昭和16）年の日米開戦により、翌年から西海岸などに暮らす日系人約12万人に強制立ち退きが命じられると、杉本も家族と共に収容所での不自由な生活を強いられることになったのです。

収容所での暮らしは3年以上にも及びました。移動の際に衣類を包んでいた布や、シーツなどをキャンバスの代わりにして描かれた一連の作品は「キャンプ・シーン」と名付けられ、理不尽に収容された人々の戸惑いや不安、怒り、監視されながらも健気に生きた人々の日常などがつぶさに記録されています。

杉本の作品は、戦後35年が経った1980（昭和55）年に初めて日本でも公開され、高い評価を受けました。1983（昭和58）年には、米議会による「米国市民の戦時中の強制疎開と収容に関する委員会」の公聴会に呼ばれ、「キャンプ・シーン」の絵画と共に証言台にも立ちました。そして1988（昭和63）年には、当時のロナルド・レーガン大統領が日系人強制収容は誤りであったことを認め、国として謝罪と補償を行う法案に署名がなされたのでした。

ヘンリー杉本の絵画は、芸術作品としての魅力のみならず、アメリカにおける日系人強制収容の歴史を記録した貴重な資料ともなっているのです。

収容所よりの移動
Onward to Another World
146×181cm
強制収容から2年くらい経ったころ、軍需産業の人手不足を補うことなどを理由に、日系人でもアメリカに忠誠を誓う書面にサインし認められれば、収容所の外で働くことができるようになった。収容所内での生活に不満を抱えていた若い人たちは、次々と収容所を去って行ったが、一方で、日本への忠誠心を捨てられなかった人や、根強く残る反日感情を心配する一世の多くは、収容所に残り続けた。作品からは、収容所に残る年老いた一世たちが、出て行く家族を力なく見送る姿が見て取れる。
写真提供：和歌山市立博物館

偉人 その4

アグロフォレストリーの父

写真：永武ひかる

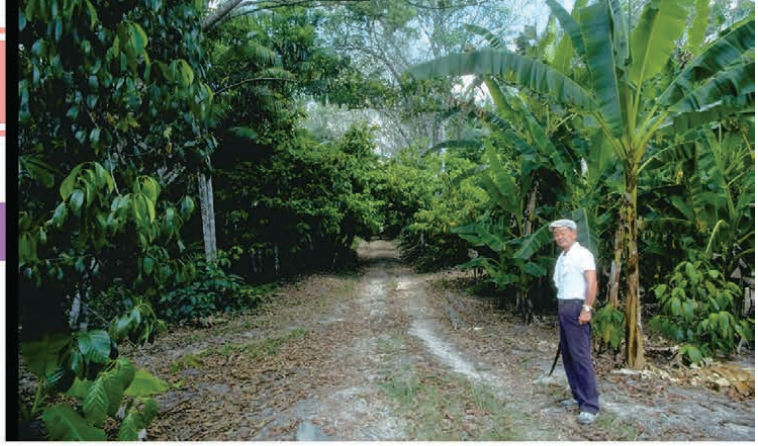
坂口 陞（さかぐち のぼる）

1933（昭和8）年、和歌山県田辺市出身の坂口陞は、東京農業大学林学科を卒業後の1957（昭和32）年、23歳の時にブラジル・パラー州の日本人移住地トメアスーに入植しました。ブラジルで数年間ゴム栽培を学び、すぐに日本に戻るつもりだったといいます。

しかし、当時トメアスーではコショウ栽培が大々的に行われており、「黒いダイヤ」と呼ばれるほどコショウ景気に沸いていました。ゴム栽培に関心があった坂口も、まずはコショウをやってみることにしました。その後、1960年代になるとコショウが根ぐされ病で枯れてしまい、移住地全体が大きな危機に陥ります。当時トメアスー農業組合の理事になっていた坂口は、コショウに代わる作物として藁（わら）にもすがる思いでカカオ栽培に着手したところ、それが大成功。わずか数年で国際相場がみるみる上がり、コショウの被害で出た借金をあっという間に完済したという逸話が残っています。

しかし、カカオ景気も長くは続かず、坂口は現地でアマゾンの森と共存して暮らすインディオたちの生活から、森を切り拓き、土を耕す焼き畑農業は、アマゾンでは通用しないことに気づきます。木を植え、葉を茂らせて日陰を作ることで、灼熱の太陽やスコール、高温多湿の厳しい気候から土を守り、昆虫や微生物が育つということに気づいた坂口は、それまで何年もかけて耕し裸にしてきた耕地に木を植え、森林に戻すことに取り組み始めます。熱帯果樹を中心に、収穫までの年月が異なるさまざまな作物を植え、畑を森として再生させる森林農法は徐々にトメアスーに定着していきました。そしてそれは、アマゾンの森林破壊や地球温暖化が深刻化するにつれ、環境に配慮した持続可能な農法「アグロフォレストリー」として世界中から注目されるようになったのです。

惜しまれつつ2007年にこの世を去った坂口ですが、その意思は次の世代に受け継がれています。トメアスーのアグロフォレストリーで栽培されたアサイーやアセロラなどの熱帯フルーツのジュースは、いま、日本でも手軽に飲むことができるようになっています。



自身の農場に立つ坂口。熱帯性果物やコショウなどを混植することで、単一の作物を作り続けることによる土地の疲弊を防ぎ、さらに森林の再生をも目指すアグロフォレストリーは、持続可能な農法として、世界の注目を浴びている。アグロフォレストリーで作られたトメアスーのカカオは、日本のチョコレートメーカーにも採用されている。　写真：永武ひかる

偉人 その5

カナダ移民の父

工野 儀兵衛（くの ぎへい）

工野儀兵衛は、1854（安政元）年に和歌山県日高郡の三尾村（現美浜町）で生まれました。14歳で宮大工の棟梁に弟子入りすると、19歳の時には弟子をとって棟梁として仕事をするほどの職人となりました。かねがね村人の生活を守るために海岸に堤防を築きたいと思っていた工野は、その資金集めも兼ねた海外雄飛を考えるようになります。大工として働きながら、神戸、横浜と移り住み、1888（明治21）年についにカナダへと旅立ちます。そしてブリティッシュ・コロンビア州の漁村スティーブストンで、漁業や農業をはじめたのでした。

ある日のこと、フレーザー川に鮭の大群がひしめく様子を見て驚いた工野は、故郷・三尾の人たちに手紙を書いて送ります。「ここに来れば鮭がいくらでも捕れる！」。缶詰の加工場もあり、カナダでの漁業に将来性を感じた工野は、故郷の人々をカナダに呼ぼうと考えたのでした。

その結果、翌年には工野の弟らをはじめとする数人がカナダに渡り、その後も毎年十数人以上が集団でカナダへ移住するようになったのです。1900（明治23）年には三尾村の出身者が集まって「加奈陀（カナダ）三尾村人会」を発足。工野の呼び寄せからわずか1年ほどで会員数は150名にもなったと言います。三尾村では「連れもて行こら（一緒に行こう）」の合言葉が流行し、その後もカナダへの移民は増え続けました。

スティーブストンに「カナダの三尾村」が形成されていった一方で、故郷の三尾村もその後、カナダに渡った移民からの送金によって経済が潤い、帰国した移住者が建てた西洋風の建物や生活様式などから「アメリカ村」と呼ばれるようになりました。現在、三尾村にゆかりのある日系カナダ人の数はおよそ5,000人と言われ、今でも移住者の子孫が三尾村を訪れるなどの交流が続けられています。

晩年、病気のために三尾村へ戻り、1917（大正6）年に63歳でその生涯を終えた工野ですが、常に故郷を想い、呼び寄せた移民たちを親身に世話した工野の名は、「カナダ移民の父」としていまもカナダ日系社会と故郷三尾村の双方で語り継がれています。

「加奈陀（カナダ）三尾村人会」の会館前で。1900年の設立当時150名ほどだった会員数はその後、1936（昭和11）年には763人に達し、1940年頃には三尾村からカナダへの移民は2,000人を超えていた。当時のブリティッシュ・コロンビア州漁業の6～7割は和歌山県人によって営まれ、その中心を担っていたのが三尾村出身者であった。

和歌山県人会世界大会

メキシコ和歌山県人会のみなさん　写真提供：和歌山県国際課

海外へ移住した人々は、それぞれの移住先で同郷の仲間たちと集い、助け合って生活してきました。海外にはいまでも、県人会組織がたくさん存在し、出身県とのつながりを維持しています。

全国有数の移民送出県である和歌山県では、2019年に、国内・海外各地の和歌山県人会に呼び掛けて「第1回和歌山県人会世界大会」を初めて開催しました。第1回大会では、海外8カ国10地域、国内6地域の県人会員が故郷和歌山に集まり、記念式典や、ふるさと巡りツアー、シンポジウム、伝統文化や郷土食の体験などを通じて郷土への誇りを高めたほか、県民に移住の歴史について改めて知ってもらうことにもつながりました。出身地別に紀北・紀中・紀南の3地域に分かれて実施したふるさと巡りツアーでは、参加者がそれぞれのルーツをめぐり、地域住民からの大歓迎を受けたほか、各地の高校を訪れて移民の歴史や世界で活躍する先人の想いなどを次世代の若者たちに伝えました。

同大会の第2回大会が、コロナ禍を経て、今年10月に4年ぶりに開催されます。大成功を収めた第1回大会よりもさらに多くの参加者が故郷に集まり、絆を深めます。

第1回大会の記念式典　写真提供：和歌山県国際課

松原移民三世からのメッセージ

「戦後ブラジル移民の父」と尊称される松原安太郎が他界し70余年を経た今、松原移民と呼ばれる入植者は世代交代が進み、孫にあたる三世の若い世代が社会活動の中心になろうとしています。活躍する彼らのメッセージをご紹介します。

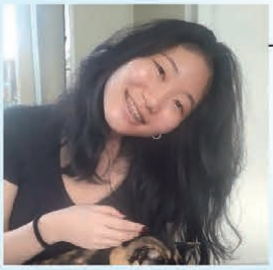
●冨家フェリッペさん(左)

火曜日の夜は「パァーちゃんの日本食デー！」。そして同時にジィちゃんの昔話を聞いていたことを懐かしく思い出します。ジィちゃんの口癖は「人生で成功した」。いつも、将来家族にとって良き未来を勝ち取るというビジョンを持って、大変な努力で言葉や文化の違いを乗り越えてきました。勇気のいることだったと思います。私はアメリカの大学で学ぶ機会に恵まれ、現在はアメリカで社会人生活を始めました。私たち家族があるのは、ジィちゃんとパァーちゃんが「より良い人生を求めて」ブラジルへ移住したお陰だと感謝しており、何より誇らしく思っています。

●高橋マルセロ建藏さん

僕は自分の名前と顔つきから、自分が「日系人」であることを自覚しました。僕が「日系人である」という理解は、僕の家族の歴史を知ることと結びついています。移住者の歴史は多くの努力と献身の物語だから、そこに日系人たちは自身のアイデンティティーを追い求めているのだと思います。

現在サンパウロ州立大学医学部の5年生です。僕は1年間ハーバード大学への留学経験がありますが、ブラジルから他の国に移住しようとは思っていません。「ブラジル」は僕にとって特別な意味を持ち、一番好きな国です。けれど僕はいつも旅をして、他国を知り、他言語も勉強して、多くの人々と知り合いになりたいと思っています。



●谷口マヤさん

小さい時から日系人が多く住む地域にいたため、日本文化は日常生活に溶け込んでいましたが、ブラジルの一般学校に通うようになり、はじめてその違いに気づきました。祖父母たちの人生やブラジルへ移住して乗り越えてきた困難についてもっと知りたいと思い、もう一度日本語を勉強しています。

現在私は、南マットグロッソ州立大学の法学部に在籍して国際法を学んでいます。世界の多くの国々の人たちと話ができるような、自分がやりたいことが実現できるような職業に就きたいと思っています。

私の「未来」はどうなるかはわからないけれど、この先、私は多くのチャンスに出会えると確信しています！

TOPICS

オンライン公開講座
「海を渡った和歌山県人との思い出～心に残る松原のおじさん～」

2023年9月23日（土・祝）10:30～12:00

講師：冨家（ふけ） 力（つとむ） 氏（和歌山県中南米交流協会 副代表）

（聞き手：水上貴雄 公益財団法人海外日系人協会事務局次長）

紀州の人々は沖合を流れる黒潮を乗り越えまだ見ぬ大地に人生をかけて果敢に挑みました。
そんな和歌山県人のひとりが、当時のブラジル大統領と親交を結び、戦後、日本からブラジルへの移住再開の道を開いた松原安太郎氏です。開業医だった私の父が松原氏の主治医として最期を看取りました。少年時代に出会った松原氏との思い出や、世界一のリンゴ王としてブラジルで活躍する同級生など、繋がりのある和歌山県人をご紹介します。

Zoomウェビナー

- ■参加費：無料
- ■対　象：どなたでも
- ■定　員：500名

参加登録はこちらから

わかぱん解説

大野（おおの） 裕枝（ひろえ） 新館長が着任しました！

9月1日に着任いたしました。多くの方に海外移住資料館を訪れていただき、約150年の海外移住の歴史、今日の世界各地での移住者・日系人の果たす役割や貢献、そして、多文化共生に向けた学びを得ていただけるよう、務める所存です。どうぞよろしくお願いします。

<休館のお知らせ>

JICA横浜では空調設備の更新、消防設備設置を目的に2023年4月から2025年3月（予定）までの間、施設の大規模改修工事を実施しています。これに伴い、2023年11月13日（月）から、海外移住資料館および閲覧室は休館となります。海外移住資料館再開館は2024年4月、閲覧室の再開室は2024年7月を予定しておりますが、工事の影響により変更となる可能性もございますので、ホームページをご確認ください。何卒ご理解ご了承賜りますようお願い申し上げます。

アクセス

- ■みなとみらい線：
  「馬車道」駅（4番出口）から徒歩約8分
  「みなとみらい」駅（クイーンズスクエア方面改札）から徒歩約15分
- ■JR線・市営地下鉄：
  「桜木町」駅から
  （汽車道→ワールドポーターズ→サークルウォーク）
  徒歩約15分
- ■バス「あかいくつ」号：
  「ハンマーヘッド」から徒歩約2分

- ●開館時間　10：00～18：00（入館は17：30まで）
- ●休 館 日　月曜日（月曜日が祝祭日の場合は翌日）、11月13日（月）～より臨時休館
- ●入 館 料　無料

独立行政法人国際協力機構 横浜センター
海外移住資料館
〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2丁目3番1号 TEL.045-663-3257 FAX.045-211-1781
https://www.jica.go.jp/domestic/jomm/index.html
Eメール jicayic_jomm_info@jica.go.jp